

なかじきり

森 鷗外

老は漸く身に迫つて来る。

前途に希望の光が薄らぐと共に、自ら背後の影を顧みるは人の常情である。人は老いてレトロスベクチイフの境界に入る。

わたくしは醫を學んで仕へた。しかし曾て醫として社會の問題に上つたことは無い。「媿婁彫朽木、老大免左遷」の句がある。

わたくしの多少社會に認められたのは文士としての生涯である。抒情詩に於ては、和歌の形式が今の思想を容るゝに足らざるを謂ひ、又詩が到底アルシヤイスムを脱し難く、國民文學として立つ所以にあらざるを謂つたので、款を新詩社とあらざり派とに通じて國風新興を夢みた。小説に於ては、濟勝の足ならしに短篇數十を作り試みた

が、長篇ちやうへんの山口やまぐちにたどり附ついて挫折ざせつした。戯曲ぎきよくに於ては、同じ足あしならしの一幕物まくもの若干いくせんが成つたのみで、三幕以上の作は徒いたづらに見放みさぐる山やまたるに止とどまつた。哲學てつがくに於ては醫者いしやくであつたために自然科學しぜんくわがくの統一とういつする所なきに惑まどひ、ハルトマンの無意識むいしきてつがく哲學がかりに假あしの足場あしばを求めた。恐おそきは幼い時をさなに聞いた宋儒理氣そうじゆりきの説せつが、微かすかなレミニスサンスとして心の底そこに残のこつてゐて、針路しんろをシヨオペンハウエルシヨオペンハウエルの流派りゅうはいに引き附けたのであらうか。しかし哲學者てつがくしやとして立言りつげんするには至いたらなかつた。歴史れきしに於ては、初め手てを下くだすことを豫期よきせぬ境まはであつたのに、經歷けいれきと遭遇さうぶつとが人のために傳記でんきを作つくらしむるに至いたつた。そして其體裁そのでいさいをして荒涼くわうりやうなるジエネアロジツクジエネアロジツクの方向かうきやうを取とらしめたのは、或あるは彼かのゾラゾラにルゴンルゴン、マカアルマカアルの血統けつとうを追尋つゐんさせた自然科學しぜんくわがくの餘勢あまりでもあらうか。

然るにわたくしには初はより自己じこが文士ぶんしである、藝術家げいじゆつがであると云ふ覺悟かくごはなかつた。又哲學者てつがくしやを以て自ら居ゐつたこともなく、歴史家れきしがを以て自ら任まかじたことも無い。唯ただ、暫留ざんりうの地ちが偶たまに田園でんえんなりし故ゆゑに耕たがへ、偶たまに水涯すゐがなりし故ゆゑに釣つつた如ごときものである。約つづて言いへばわたくしは終始しゆうしヂレットタンチスムヂレットタンチスムを以て人に知しられた。歲計さいけいをなすものの中なか爲切たぎと云ふことがある。わたくしは此數行このすうかうを書して一生しよの中なか爲切たぎとする。しかし中爲切すなはが或あるは即ち總勘定さうかんぢやうであるかも知れない。少くも官歴くわんれきより觀みれば、總勘定さうかんぢやうも亦此またの如ごときに過ぎない。

是が過去である。そして現在は何をしてゐるか。

わたくしは何をもしてゐない。一閒人として生存してゐる。しかし人間はエジエタチイフにのみ生くること能はざるものである。人間は生きてゐる限は思量する。閒人が往々棋を圍み骨牌を弄ぶ所以である。

剩す所の問題はわたくしが思量の小兒にいかなる玩具を授けてゐるかと云ふにある。爰に其玩具を檢して見ようか。わたくしは書を讀んでゐる。それが支那の古書であるのは、今西洋の書が獲難くして、その偶獲べきものが皆戰爭を言ふが故である。是はレセプチイフの一面である。他のプロドユクチイフの一面に於ては、彼文士としての生涯の精力が、僅に抒情詩と歴史との部分に遺殘してキタ、ミニマを營んでゐる。

わたくしは詩を作り歌を詠む。彼は知人の采録する所となつて時々世間に出るが、此は友人某に示すに過ぎない。前にアルシヤイスムとして排した詩、今の思想を容るゝに足らずとして排した歌を、何故に猶作り試みるか。他なし、未だ依るべき新なる形式を得ざる故である。是が抒情詩である。

わたくしは紋實の文を作る。新聞紙のために古人の傳記を草するのも人の請ふがまゝに碑文を作るのも、此に屬する。何故に現在の思量が傳記をしてジエネアロジツクの方向を取らしめてゐるか、未だ全く自ら明にせざる所で、上に云つた自然科學の影響の

如きは、少くも動機どうきの全部ぜんぶではなさきうである。趙翼てうよくは魏收ぎしうを刺そしつて「代人作家譜」と云つた。しかしわたくしの傳記を作るのと、支那人が史を修めたのとは、其動機に同じからざるものがあるかとおもふ。碑文かんばんたいに漢文體もちを用ゐるのも、亦形式未成またけいしきみせいの故である。是が歴史である。現在は此の如くである。

近ごろわたくしを訪とうて文學藝術ぶんがくげいじゆつの問題もんだい乃至社會問題に關する意見を徵し、又小説を求むるものが多い。わたくしは其の煩はんに堪たへない。敢てあからさまに過去くわこと現在げんざいとを告つげて徵求ちようきうの源みなもとを塞ふさぐ。

顧炎武こえんぶは嘗て牌はいを室しつに懸かけて應酬文字おうじゆもんじを拒絶きよぜつした。此「なかじきり」もまた顧家懸牌こかけんはいの類るゐである。

(大正六年九月)